

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第11回 南スーダンからの難民の流入が止まらない！

私は昨年6月にウガンダに着任しました。ウガンダの滞在がほぼ1年となりましたが、あっという間の1年でした。しかし、充実した1年を過ごすことができました。そして、この1年を改めて振り返ってみますといろいろなことがありました。その中でも、大事件の一つに2016年7月から大量の南スーダン難民がウガンダに押し寄せてきたことが挙げられます。この難民流入によるウガンダの社会的及び経済的な負担が重荷になっていることから、この対策を国際的に議論する目的で6月22、23日の両日にここカンパラでグテーレス国連事務総長の出席も得て、難民連帯サミットが開催されることになりました。今回は、この問題を取り上げてお話しします。

1980年代に始まった内戦を経験して、人口820万人の南スーダンは2011年7月に世界で一番若い国として独立しました。しかし、2013年12月に大統領派と副大統領派との間で大規模な衝突があり、多くの難民を発生させ、ウガンダにも10万人を超える南スーダン人が国境を超えて避難してきました。その後両派の間で和平調停がなされ改めて国造りが再開されると期待されたのですが、昨2016年7月に再び首都ジュバにおいて大統領と副大統領の警護隊同士の撃合いが発生し、それが国内各地の治安悪化にまで発展しました。この事件の影響で治安情勢の悪化が今も続いており、昨年7月から現在までの11ヶ月間で新たに160万人の難民が発生しました。ウガンダはそのうち64万人余りの難民（その多くが女性や子供たち）を受け入れています。



南スーダンとの国境



難民持参の財産

ウガンダでは過去において国土が混乱して自分たちがかつて難民として隣国に避難していた経験がある人が多く、特に大統領を含めて現在の政府の要人にはそういう経験者が少な

くありません。また、ウガンダでは国境付近の隣国の人とは言葉や文化を共にしていたりして、彼らを温かく迎え入れる素地があります。しかし、難民を受け入れる善意の気持ちがあっても、ウガンダ自身が貧しい開発途上国であるためこれだけ急激かつ大量の難民を受け入れる社会的・財政的な余裕は残念ながらありません。そのような中で、UNHCRやWFPといった国連機関が緊急援助をウガンダ国内で積極的に展開しています。日本のNGOも南スーダン難民支援のためにウガンダ北部の難民居住区域で活動しています。



到着したばかりの難民



ピース・ウィングス・ジャパン設置の
給水タンク

昨年7月に勃発した衝突事件をきっかけに始まった急激な大量な難民受入れを北部ウガンダの既存の難民居住区域ではできなくなったため、昨年8月3日にウガンダ政府は同じく北部ウガンダのビディビディというところに土地を提供して新たな難民居住区域を開設しました。私は、それから1か月経った9月3日にウガンダ政府とUNHCRのアレンジで他の外交団とともにこの難民居住区域を視察しました。この視察では、国境での難民受入状況を知るとともに一時的受入センター、難民登録状況なども視察することができました。この時点でビディビディ難民居住区の難民数は3万6千人でした。しかし、この難民居住区域には十分な水も食料もなく、ましてや設備の整った医療施設もありません。何も無い荒野にたった1ヶ月の間に人口3万6千人の村が突然できたと想像してみてください。到着した難民、難民といってもその8割を占めているのが女性と子供でした。彼らは着の身着のまま命からがら数日歩いてウガンダとの国境にたどり着いた人ばかりです。そういった難民にUNHCRは、緊急キット（プラスチックシート等ととりあえず雨露をしのいで寝泊まりするに必要な資材、当面の食材、料理用簡易ストーブ等）を配給、ワクチンを接種します。南スーダンの住民は全く基本的な保健サービスを受けていないのです。彼らに予防接種をすることは、ウガンダの地域住民を疫病から保護するために必要不可欠な措置なのです。それに加えて、居住区域には生活のための給水タンクを設置し、食料を配給し、簡易トイレを設置するなど最低限の社会インフラを用意する必要がありました。このスピ

ードを要する作業をやり遂げるUNHCR職員の仕事ぶりを目の当たりにして、その対応能力の高さに驚かせられました。

さて、それから更にちょうど8ヶ月経った5月3日、私はビディビディ難民居住区域を再び訪問しました。今度はそこで活動する日本のNGOの活躍を知っておきたかったからです。この8ヶ月の間にビディビディ難民居住区域の人口は3万6千人から27万人に膨れ上がっていて、ついに世界で最大の規模の難民居住区域になっていました。そして居住区域全体の広さは、240平方kmという途方もない数字です。27万人というと東京都目黒区や茨城県水戸市の人口に匹敵します。広さはというと山手線の内側の4倍の面積に相当します。



簡易トイレ



教師と児童と

そういうところでNGO「難民を助ける会」と「ピース・ウィンズ・ジャパン」の若い人たちが頑張っています。「難民を助ける会」は、難民居住区域内に小学校の仮校舎を建てたり、同居住区域に接していて難民の子供たちも通う既存の地元小学校の校舎を増設し、そこに机やベンチといった学校用家具を提供したり、子供たちに学用品を配布するなどの活動をしています。その地元小学校では児童の半分が難民の子供で占められ、それでいて教師の数は増やしてくれていないということでなかなか授業がままならないと教師の代表の方は話してくれました。しかし、地元の子供たちと難民の子供たちは一緒になって話したり、走ったりと仲良くやっているようで安心しました。「ピース・ウィンズ・ジャパン」は、水の供給や社会的弱者のための簡易トイレの建設を手掛けています。既に述べましたように飲み水や生活のための水の提供は大きなチャレンジです。飲み水や生活用水当初は遠くナイル川から汲んでこれを消毒して大型ローリーで難民居住区域まで運んでいます。その間に井戸を掘って現地での水の調達の助けにきています。「ピース・ウィンズ・ジャパン」は、貯水容量1万リットルのタンクを10個ほど設置するとともに、老人や身障者の便宜のために居住している小屋の近くに100個ほどの簡易トイレを設置していま

す。これらの作業のために現地業者や難民自身を雇うことにより、一時的とはいえ現地の方々や難民の収入活動にもなっています。

両NGOの日本人の現地駐在員は5名でいずれも若い方々です。皆さん、食べるところにも寝るところにも不自由しながらも、元気いっぱい活動しているようで安心しました。中には、日本で超満員電車で毎日通勤（それとも「痛勤」？）するよりもこのウガンダ北部の広々としたところで車両通勤できる方が楽だと言う頼もしい人もいました。しかし、生活の不自由さを乗り越えて、そして、疲れた体や心を和ませてくれるのは、何よりも自分たちが関わったことに対する難民の人たちからの感謝の言葉と笑顔とのことでした。自分の行動の手応えがしっかり見えるということは前に進む勇気を生んでくれるのですね。若い日本人現地駐在員の活躍ぶりを間近に見て、そのように思いながら、ビディビディ難民居住区域を後にしました。



難民居住区内小学校



両NGOの面々と

(以上)